

児島宏子訳「アオサギとツル」、その他によせて

出羽弘

表紙には二羽の鳥の絵。カタカナの表題。「子供向き」に見える「絵本」。わずか32ページ。だが、じっと見てみると、とってもおしゃれな装いです。机の上に2週間。気になり始めました。とうとう手にとって、一気に「見終わって」しまいました。今度は「読み」始めました。面白い。3度目には、翻訳者特有の「プロの目」で、原文から訳文、背景まで吟味し、考え始めました。本の見開きの右側だけに、おたがいに「人間的」にツッパリながら悩む2羽の鳥の絵が合計15枚。左側は白紙同然、2行か3行の金文字のロシア文があり、その下に訳が小さくついているだけです。だのに……!

ロシア文学と文学語の伝統を極度に凝縮した、しかし超モダンな「絵本」。これが私の結論です。チェホフの短編にも劣らない、男と女の心の機微に入った恋物語。それもそのはず、これはダーリの集めた民話のひとつを、現代のロシア映画界で活躍しているアニメ作家・監督・美術家のノルシテインとヤールブソフ夫妻が作り上げた「8歳から80歳までの子供のための」絵本なのです。ツルとアオサギも「ファッショナブル」に描かれ、簡潔で適切な日本語訳がいっそう内容の近代性を高めています。

わが国では、ダーリは有名な辞典の編纂者として知られていますが、医師で、オレンブルグ州の生物相の研究で科学アカデミーの準会員にまでなった博物学者です。何よりも愛したのはロシアの民衆の口伝とその言語でした。作家としても活躍し、プーシキンの親友でもあり、決闘で倒れた彼が息を引き取るまで枕頭にあってそれを見取ったのが、ほかならぬこのダーリでした。近代的なロシア文学とロシア文学語を本格的に仕上げたのがプーシキンであるとすれば、ダーリはこれを生きた言葉の辞典に仕上げた。クルイロフ、プーシキンやダーリなどのめざした

文学と言語は、民衆に根をおいた、すぐれて近代的なものでした。しかしスターリン時代以降、ロシアの「文学語」は硬直化した「規制語」になってしまいました。「雪解け」以来の人々のたたかいのなかで、再びロシア語は自由を取り戻しつつあります。この「アオサギ」の本は、この新しい蘇生の流れを極限まで芸術的に単純化し、凝縮した「大人のための絵本」です。

ソクーロフ監督の最近作の映画「ドルチェ・やさしく」について、児島さんはこの5月に岩波書店から出た同名の本(ISBN4-00-024119-2)の中で、「私たちスタッフはただあきれ、感嘆し、ため息をついた。よくあそこまで抑制したものだと。よく撮りためたものをカットしたものだと。(中略)そのために、はるかに普遍性を帯びることになったかも…」と書いています。この小さな2羽の鳥の絵本もやはり「省略の極限」です。出版社「未知谷」(みちたに)。1200円、ISBN4-89642-028-4。

この出版社からは同じく協会会員である北川和美さんの訳になる「亡命ロシア料理」(2000円)がすでに出版されています。ユーモアと機知、軽快なリズムの翻訳で小気味よく仕上げられた「大人のための大人の本」です。

昨年10月に児島さんの訳で福音館書店から「きりのなかのほりねずみ」が出版されています。産経新聞から第48回児童出版文化賞が授与されました上記夫妻とコズロフの共著の大判(A4、40ページ)で、ハリネズミ君がコグマ君の所につくまでの小さな冒険物語です。霧のなかの白馬、輝く目玉のミミズク、歌手の内藤やす子のような顔をした親切な犬君、正体不明のサカナさんなどが暗い森や沼から次々に登場します。魅力は、やはり大胆なカットととてつもない誇張がうみだす夢幻的な世界です。どのページでもいいから額縁にいれて翻訳者の仕事部屋に飾りたくなる、オトナの絵本でもあります。1365円、ISBN4-8340-1705-2